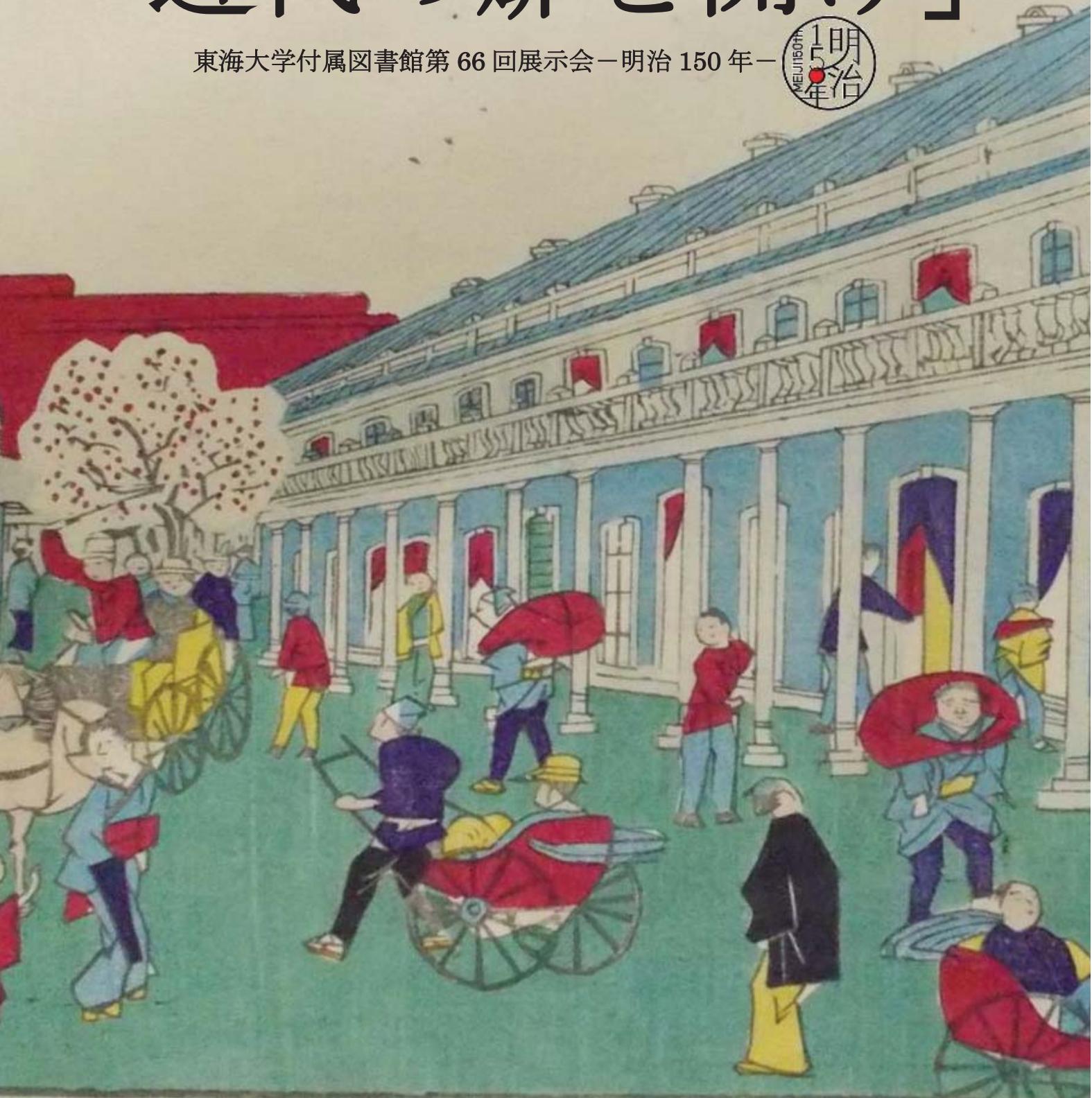


「近代の扉を開け」

東海大学付属図書館第 66 回展示会－明治 150 年－



2018年10月22日(月)～12月14日(金)

東海大学湘南校舎 付属図書館展示室 (11号館1階)

～ 最近の展示 ～

- 2011年 11月 悠久のナイルと人々～鈴木八司古代エジプトコレクション展
- 2012年 5月 國文學の傳燈 写す・読む・伝える－桃園文庫の世界－
- 2013年 6月 語り継がれる書物たち
- 2014年 7月 科学と技術の古典
 - 11月 書物に棲む動物たち
- 2015年 5月 幕末・明治を生きた人々
 - 12月 桃園文庫展－池田亀鑑の仕事－
- 2016年 5月 東海大学付属図書館 特別図書展
 - 11月 武士(モノノフ)展
- 2017年 6月 連歌展
 - 10月 創立者 松前重義
- 2018年 1月 知と技の劇場 -華麗なるバロック稀覯本の世界-

表紙は資料29より

展示にあたって

2018年は明治元年から満150年にあたります。今回の展示では、明治150年にちなみ、ペリー来航から明治初期の資料を紹介します。

幕末から明治初期の日本は西洋諸国に負けない独立した国家を目指し、技術・知識・文化を積極的に取り入れました。外国の技術・知識・文化を学ぶために派遣された使節団や留学生、西洋の技術を取り入れるために雇い入れた「お雇い外国人」関連の資料を選定しました。また、当時の風物がわかる資料も展示しています。

新しい国を作ろうとした人々や、その当時の様子を感じていただけたら幸いです。



資料42より

以下*が付いている番号の資料の和タイトルは仮和訳タイトル。

<海を渡った日本人：使節団・留学生関係>

1. 異国船海防関係文書 15通

書写者不明 嘉永6 [1853]

ペリー及び外国艦船来航にまつわる資料。整備された台場(砲台)の見取り図や、老中阿部正弘への風刺を含む当時流行した狂歌などが収集されている。

2. 木戸孝允書簡：高杉小忠太宛 2通

[木戸孝允] [1871-1873]

木戸孝允(桂小五郎)は明治4(1871)年、岩倉具視を全権大使とする欧米巡回使節団に大久保利通とともに副使として加わった。目的のひとつに条約改正の予備交渉があった。こちらの2通の書簡は木戸孝允が高杉小忠太に宛てたものである。高杉小忠太は高杉晋作の父で木戸孝允と同じ長州藩士である。1通目は使節団として行くときに書かれたもので、高杉晋作の遺児についても触れられている。2通目は、帰国したことを記している。

3. 訓蒙窮理図解 / 福沢諭吉著 改正再刻

出版者不明 [1871]

福沢諭吉は文久遣欧使節団に参加した。その時の記録を元に「西洋事情」を出版し、当時大ベストセラーになった。

この資料は「くんもう きゅうり ずかい」又は「きんもう きゅうり ずかい」と読む。1861年から1867年にかけてイギリスとアメリカで出版された物理書、博物書、地理書を参考にして、福沢諭吉が明治元(1868)年に日常の身近な自然現象を平易に図解し説明した書物である。日本で最初の科学入門書とされる。

4. 学問すゝめ / 福沢諭吉著 再版

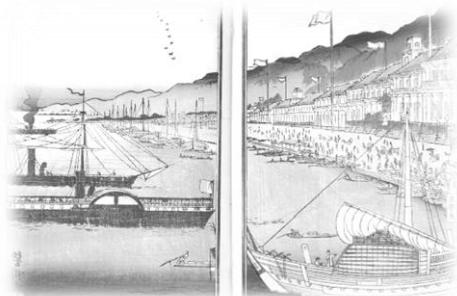
福沢諭吉 1880

福沢諭吉の代表作である。冒頭にある「天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ人ノ下ニ人ヲ造ラズ」は有名な文である。人は平等である、個人と国が豊かになるためには学問をすることが重要だと説いている。標題紙のタイトルは「学問すすめ」だが、背のタイトルは「学問のすすめ」となっている。この資料は明治5-9(1872-1876)年刊、初編-第17編の合本再版である。

5. 新島襄先生之伝 / ゼ・デ・デビス著 村田勤、松浦政泰合訳

大阪 福音社 1891

まだ日本人が海外への渡航を許されていない時に、個人で密航し留学した新島襄の記録。新島襄は当初、蘭学を修めたが、これからは蘭学の時代ではないと外国に飛び出した。最初は箱館に行き、密航の機会を狙った。渡航後は理解者の下で約10年間、語学、神学を学び、10年後に新島襄は帰国し、キリスト教布教や教育に力を注ぐ。同志社大学創始者。



6. 畢酒林氏万国公法 / 畢酒林著 西周助訳

萬屋忠藏ほか 慶応4[1868]

「ふひすりんくしべんこく こうほう」と読む。万国公法とは今の国際法を示す。西周(にしあまね)は幕命により、オランダへ文久2(1862)年から慶応元(1865)年まで留学した。ライデン大学で西洋の哲学・政治・経済などを学ぶ。大学教授シモン=フィセリングから自然法・万国公法・国法・経済・統計の5科を学び、この「万国公法」はフィセリングの講義をまとめ、訳したもの。

7. 慶応二年型パスポート用紙

長崎 日本外国事務局 [慶応2[1866]]

慶応2(1866)年に幕府が発行した日本初期のパスポートの用紙。同年、幕府は修学及び商業の目的に限って身分に関係なく海外渡航を許可する布達を発しており、それに伴い日本国が発行する証書としてのパスポートが制定された。この用紙に居住地や年齢、身長、体形などの身体的特徴と渡航理由を書き込んで使用した。長崎第百三号とあり。

<お雇い外国人の著作物>

8. 日本地質の探究：ナウマン論文集 / Heinrich Edmund Naumann著 山下昇訳

東海大学出版会 1996

ナウマン(Heinrich Edmund Naumann J.L.C.)はドイツの地質学者。日本政府から東京開成学校(現東京大学の前身のひとつ)の鉱山学科に招かれたが、明治8(1875)年來日のとき鉱山学科は廃止されていたため、金石取調所で和田維四郎(つなしろう)と鉱物の調査にあたった。明治10(1877)年に東京大学が創設され、地質学担当の教授となった。のちに地質調査所が設立されるとここに移り、地質調査の指導にあたった。また、ナウマンゾウは彼を記念して命名されたものである。本書には滞日10年の間に日本の地質学・古生物学・地体構造論などの基礎を築いたナウマンの論文16編が収録されている。

9. ポンペ化学書：日本最初の化学講義録 / ポンペ述 芝哲夫訳

化学同人 2005

ポンペ(Pompe van Meerdervoort)はオランダの軍医。安政4(1857)年11月、長崎奉行所西役所で始まった西洋医学伝習のオランダ人教師。ポンペは医学だけではなく西洋医学の基礎知識である化学や物理学なども総合的に指導しており、本書はその講義録として残された本邦最初の外国人による化学講義の内容の記録である。

10. 商法草案 / ロエスレル氏起稿 司法省訳 復刻版

新青出版 1995

ロエスレル(Karl Friedrich Hermann Roesler)はドイツの法学者、経済学者。レースラーともよばれる。明治11(1878)年、明治政府の招きで来日し、政府顧問として明治26(1893)年まで法典編纂に大きな貢献をした。とくに明治14(1881)年より井上毅(いのうえこわし)と討論を重ね、伊藤博文の渡欧以前にプロイセン憲法に範を求める憲法の制定を政府に決断させるのに多大な影響を与えた。そのほか、行政裁判制度、民法、商法の制定にも貢献した。本書は現代に続く日本の商法の出発点となった貴重な資料である。

11. 銀行諸帳面取扱手続書 / アラン・シャンド著 大蔵省 [訳] 編 (復刻叢書簿記ことはじめ 第2期)

雄松堂書店 1981

シャンド(Alexander Allan Shand)はイギリスの銀行家。文久3(1863)年マーカンタイル銀行横浜支店長格で来日。明治5(1872)年日本政府に国立銀行の経営指導者として雇われ、銀行簿記、金融業務を指導。「銀行簿記精法」「銀行大意」を著し、日本金融界の近代化につくした。本書は漢字とカナが入り混じった手書きの手続書であり、日本の銀行制度の原点が伺える。

12. 日本素描集 / ビゴー *

Croquis Japonais / par G. Bigot

Tokio 出版者不明 1886

ビゴー(Georges Ferdinand Bigot)はフランスの画家、銅版画家。浮世絵にあこがれ、日本美術を学ぶため明治15(1882)年に来日した。士官学校の画学教師、仏語教師等をするうち、次第に日本人と日本の行く末に興味を持ち、ついには18年におよぶ歳月を日本で過ごすことになる。その間、西洋文明を巧みに吸収しながら変貌していく文明開化の明治社会と、たくましく生活する様々な階層の人々を、時に痛烈な風刺を交えながら描き続けた。ビゴーは地方を旅行して取材した風俗を銅版画集として出版しているが、本書もそのうちのひとつである。彼の仕事が順調に進みはじめ、日本への関心が社会全体へと深さを増して行く時期に刊行された。官吏、軍人(将校、水兵、兵卒)をはじめとして僧侶や小学生、車夫や物売り、女中、按摩など、貧富あまたの人々の生の姿を描きとめた、すぐれた歴史的資料である。本書は好評を得て、その後も5年ほど刊行を繰り返し、一部内容の変わったものも残されている。

13. 日本の絵画芸術 / アンダーソン *

The pictorial arts of Japan / by William Anderson

London S. Low, Marston, Searle & Rivington 1886

アンダーソン(William Anderson)は明治6(1873)年に来日し、海軍医学学校において日本の医学教育に貢献した。日本美術にも興味を持ち、理解を深め明治13(1880)年に英国へ帰国後本書を記した。本書は歴史的視野から日本美術をヨーロッパへ紹介したごく初期のものといえる。140以上の図版がテキストと共に載せられており、80枚あるプレートの多くは見開きの形で詳細な解説が付けられている。それらの図版によって、今は目にすることも困難な絵画や陶器などの工芸作品を多く楽しむことができる。

邦訳:「日本美術全書」末松謙澄訳輔 エディション・シナプス 2007

14. 日本の造園 / コンドル 2版 *

Landscape gardening in Japan / by Josiah Conder. 2nd and rev. ed.

Tokio Shuyeisha 1912

コンドル(Josiah Conder)は明治初期に来日したイギリス人の建築家。明治10(1877)年に工部大学校(現東京大学の前身のひとつ)に教師として就任し、辰野金吾など日本における西洋建築の先駆者達を指導した。本書では日本庭園の歴史から、灯篭、橋、池などの詳細を分析し、豊富な図版を用いて解説している。明治の日本に残った伝統的庭園の資料として貴重な文献である。補遺には小川一真撮影の写真が多数収録されている。初版は1893年。

15. 明治日本の政治史1897-1912 / マクリーン *
A political history of Japan during the Meiji era, 1867-1912 / Walter Wallace McLaren

New York Russell & Russell 1965

マクリーン(Walter Wallace McLaren)はカナダのオンタリオ州で生まれ、明治38(1905)年まで当地で牧師として活躍。明治41(1908)年ハーバード大学より博士号を取得して来日し、慶應義塾教授に就任した。創刊して間もない「三田学会誌」に多くの論文を寄せている。アメリカに渡った後、日本についての専門家として活躍することになった。初版は1916年で、展示したものは1965年刊。

16. 日本鉱物資源に関する覚書 / フランソワ・コワニエ著 石川準吉編訳

羽田書店 1944

コワニー(コワニエ Coignet François)はフランスの鉱山技術者。明治期のお雇い外国人の一人。サンティエンヌ鉱山学校を卒業後フランス、アルジェリア、スペインなどで鉱山技師として働き、慶応3(1867)年、薩摩藩の招きで来日した。明治元(1868)年、明治政府に雇用され、生野(いくの)鉱山に赴任、ここに輸入した新しい鉱山機械を設置し、またフランス人技師を招いて生野鉱山学校を開設するなど近代的な鉱山とした。本書はコワニー自ら調査し全国の鉱山資源についてまとめたものである。

17. ホーレス・ケプロン自伝 / ホーレス・ケプロン著 西島照男訳

札幌 北海道出版企画センター 1989

ケプロン(Horace Capron)はアメリカの農政家。明治4(1871)年6月、北海道の開拓使十年計画推進のため、黒田清隆の要請に基づき、大統領グラントの推挙で、開拓使顧問として多くの技師を伴って来日した。各種調査にあたり、以後の北海道開発方針の基礎をつくった。帰国に際して残した「ケプロン報文」に基づいて札幌農学校開設などその献策の多くが実施された。岩倉使節団に同行の津田梅子ら5人の少女のアメリカ留学生の派遣も彼の建言による。本書はケプロンが死の直前に自身の生涯を振り返って著したものであり、本来他人に見られることを想定していなかった。

18. 都市への給水 : W·K·バルトンの研究 / W.K. バルトン原著 平山育男編著 金出ミチル訳

中央公論美術出版 2015

バルトン(William K. Burton)はイギリスの衛生工学者。明治20(1887)年来日し、帝国大学(現東京大学の前身)衛生工学初代教授となる。また内務省衛生局顧問技師として東京、横浜、名古屋などの上下水道の調査、設計、工事につくした。本書はまだ上下水道の設備が整っていなかった明治時代の日本において丹念に衛生調査を行い、実務の手引きとして書かれたものである。

19. 欧州各国憲法 / ラフェリエール纂輯 バドビー訂正 田中耕造、ヴヘルベック、齋藤利敬訳 細川潤次郎、河津祐之校閲

信山社出版 2001

フルベック(ヴヘルベック Guido Herman Fridolin Verbeck)はアメリカの宣教師。安政6(1859)年来日。佐賀藩の学校致遠館(ちえんかん)で教えた。後に東京の大学南校(現東京大学の前身のひとつ)の教頭に招かれ、破格の待遇を得る。明治政府のために開港、開国、開教(信教の自由)、教育の各領域にわたって宣教師の役割を超えて力を尽くした。本書はヨーロッパ各国の憲法を紹介したものである。語学が堪能だったフルベックは、諸外国の法制度を積極的に翻訳し、日本に紹介した。

20. 東京駅誕生：お雇い外国人バルツァーの論文発見 / 島秀雄編

鹿島出版会 2012

バルツァー(Franz Baltzer)はドイツの鉄道技師。明治31(1898)年に来日し、新橋—東京駅間の高架線工事に尽力し、また、東京の鉄道網全体への提言を行なった。本書では、バルツァーが東京の鉄道網に対して提言した内容について、また、それを受けた鉄道の建設、改良の変遷、そしてバルツァーを取り巻く人々について詳細な説明がなされている。

<お雇い外国人が紹介した日本：江戸の空気が色濃く残る明治>

21. ミカド / グリフィス

The Mikado's Empire / by William Elliot Griffis

New York Harper 1876

グリフィス(William Elliot Griffis)は明治3(1870)年に福井藩の招きにより来日したアメリカ改革派教会の宣教師。はじめは福井藩で、明治5(1872)年からは大学南校、開成学校(現東京大学の前身のひとつ)に移り明治7(1874)年まで化学・物理を教えた。彼は日本学の草分け的存在として、日本人の慣習や歴史について研究し、日本文化を熱心に紹介した。日本に関する著作も多く発表している。本書は明治9(1876)年に出版されて以来、版を重ね、長年にわたって日本に関する情報源として大きな役割を果たした。グリフィスは「日本の住民や国土のひどい貧乏とみじめな生活」という印象を持った。しかし、女性の地位は東洋の他の国に比べ高く、尊敬と思いやりで遇せられているのがわかると記している。

邦訳：「ミカド：日本の内なる力」亀井俊介訳 研究社出版 1972 ほか

22. 日本見聞記 / ブスケ

Le Japon de nos jours et les échelles de l'extrême Orient / Georges Bousquet

Paris Hachette et cie 1877

ブスケ(Georges Bousquet)は、フランスの法律家。明治5(1872)年、司法省の法律顧問として来日。明法寮(司法省法学校の前身)で法律を教える。江藤新平の民法典編集に参加した。彼は日本人が庶民に至るまで行儀がよく、温かい心遣いができることに感銘を受けたという。

邦訳：「日本見聞記：フランス人の見た明治初年の日本」野田良之、久野桂一郎共訳 みすず書房 1977

23. 大日本帝国 / メチニコウフ *

L'empire Japonais / texte et dessins par Léon Metchnikoff

Genève Atsume Gusa 1878

メチニコフ(メチニコウフ Léon Metchnikoff)は、ロシアの語学教師。明治7(1874)年来日。東京外国语学校のロシア語教師となる。彼は日本人が礼儀正しく、庶民の間でも諍いが起きないことに驚いた。明治9(1876)年病で離日し、スイスに明治16(1883)年に戻り、地理、統計学を教えた。著作に「亡命ロシア人の見た明治維新」渡辺雅司訳(講談社 1982)などがある。日本文化を高く評価したメチニコフは本書をはじめ多数の日本に関する書物を執筆し、ロシアにおける日本研究のさきがけとなった。

24. 日本その日その日 / モース

Japan day by day : 1877, 1878-79, 1882-83 / by Edward S. Morse

Boston Houghton Mifflin 1917

モース(Edward Sylvester Morse)はアメリカの動物学者。標本採集に日本に訪れ、明治10(1877)年、東京大学(現東京大学の前身のひとつ)の教授となった。大森貝塚の発見や東洋初の臨海実験所を神奈川の江ノ島で設けたことで知られている。モースは日本人は道徳観念が強く慎み深いと感じたようである。また、子どもを可愛がり、「子ども天国」とも述べている。

この資料は文明開化直後の庶民の暮らしぶりなどを挿絵入りで詳細に紹介している。

邦訳：「日本その日その日」石川欣一訳 科学知識普及会 1929

25. お雇い外人の見た近代日本 / リチャード・H.ブラントン著 德力真太郎訳

講談社 1986

ブラントン(Richard Henry Brunton)は、イギリスの技術者。慶応4(1868)年来日し、本格的な洋式灯台の建設に携わった。さらに自身の工学知識を活かして鉄道建設の必要を建言し、まず東京—横浜間の鉄道敷設を説いた。また、横浜にあった鉄(かね)の橋の吉田橋の架設や横浜居留地の公園計画、下水道敷設などを行った。本書は、ブラントンが死ぬ数ヵ月前から文献を集めて日本の開国の歴史と、かつて自分が日本で建設の事業に従事した体験を著したものである。

26. ドイツ歴史学者の天皇国家観 / ルートヴィッヒ・リース著 原潔、永岡敦訳

新人物往来社 1988

リース(Ludwig Riess)はドイツの歴史学者。日本の帝国大学より教師として招聘(しょうへい)を受け、明治20(1887)年に来日し帝国大学(現東京大学の前身)史学科で英語を教え、東京大学を中心とするアカデミー史学の基礎を確立した。『史学雑誌』にも多くの論文を発表した。本書でリースは日本の政治経済から文化、こまごまとした歳時まで幅広い物事をヨーロッパと比較しながら書き残している。

27. チェンバレンの明治旅行案内 / B.H.チェンバレン、W.B.メーソン著 楠家重敏訳

新人物往来社 1988

チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)はイギリスの日本語・日本文化研究者。明治6(1873)年来日、帝国大学(現東京大学の前身)教師となり、教え子に複数の文学者を輩出する。『古事記』の英訳をはじめ、多数の著作で日本語・日本文化を研究・紹介した。本書では外国人向けに日本の地理歴史から風俗習慣に至るまでが詳細に解説されており、日本文化の総論ともいいくものである。彼は「古い日本は妖精の棲む小さくてかわいらしい不思議の国であった」「渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社 2005引用)と感じ、日本人が過去を捨て、その性質も変わりつつあることに悲しみを感じていた。

<新しい国家を目指して>

28. 紙幣類貼込

(太政官札/軍用手票/為替/江戸・横浜通用金札/臨時シベリア政府紙幣/西郷札:軍札/集書院読書通券)

慶応3-大正8(1867-1919)

幕末から明治期の紙幣類8種を台紙に貼付したもの。1の太政官札は明治政府が財政資金の不足を補うとともに、殖産資金を供給するのが目的であった。丈夫で、水にも強く印刷にも適して福井藩の越前和紙が選ばれ全国共通の紙幣として作られた。



- 1:太政官札 明治政府の発行した最初の紙幣。慶応4(1868)年
- 2:軍用手票 軍隊が作戦地域や占領地域において、軍費をまかなうために正貨に代わって発行する紙幣 明治37(1904)年
- 3:軍用手票(2と同一)
- 4:為替 発行年不明
- 5:江戸・横浜通用金札 横浜貿易用に江戸幕府が発行した紙幣 慶応3(1867)年
- 6:臨時シベリア政府紙幣 臨時シベリア政府によりオムスクで発行された紙幣 大正8(1919)年
- 7:西郷札と言われる軍札。西南戦争の際に西郷軍戦費調達のために発行した紙幣 明治10(1877)年
- 8:集書院読書通券 明治6(1873)年

資料28より

29. 東京名所京はし銀座煉化石

明治初期

昇斎一景による錦絵。明治5(1872)年に銀座・京橋一帯は大火に見舞われており、その後火事に強い都市のモデル地区に選ばれ煉瓦造りとなった。この錦絵にはその西洋風の街並みが描かれている。一景は江戸後期から明治時代の浮世絵師。風景画を多数描いているが、詳細な経歴については知られていない。

30. 官板実測日本地図 / 伊能忠敬作製 官板

[大学南校] [明治3[1870]]

伊能忠敬が作製した「大日本沿海輿地全図」(文政4(1821)年)の「小図」と「北蝦夷(樺太)」をもとに、幕末に江戸幕府の開成所から刊行されたものの再版で、明治3(1870)年、大学南校(現東京大学の前身のひとつ)から刊行されたものと推察される。全体は下記の4図から構成されている。(1)畿内、東海、東山、北陸 (2)山陰、山陽、南海、西海 (3)蝦夷諸島 (4)北蝦夷諸島

31. 明治改正大日本輿地全図：中村氏

大阪 臥龍軒 明治期

明治期の日本地図。大日本中村氏蔵版。題箋には「大日本国細見全図」とあり。樺太から沖縄まで記載されており、竹島や松島の記載もある。

32. 託麻郡上無田村全図并字限り図

書写地不明 大川博 昭和39(1964)

明治16年作製 昭和39年6月大川博復製。託麻郡上無田村は現在の熊本県熊本市の一部。元の地図は明治政府が地租改正を行った後に作成された。

33. 小学作文書 / 稲垣千穎 首巻

土方幸勝 1877

稻垣千穎による。稻垣は国学者、教育者、歌人、唱歌作詞者、教科書編集者。東京師範学校教諭として和文教育を行い、多数の和文教科書を編纂した。また『螢の光』の作詞もしている。



資料34より

34. 小学女子体操書 / 松岡彪編

神戸 船井弘文堂 1886

最初期の女子向けの体操書。明治に入り強靭な国民を養成するために女性の健康と体位向上が重要視された。ここでは書名に体操という言葉が使われているが、体育という言葉が定着したのは明治11(1878)年頃とされている。

35. 英語箋 / 石橋政方謹識 中山武和校正

出版者不明 万延2[1861]

石橋政方編著の英会話の書。対外交渉にはオランダ語を使用するのが主流であった時代の最初期の英語学習書のひとつである。石橋は幕末一明治時代のオランダ通詞(つうじ)、官吏。通詞とは長崎でオランダ人や中国人を相手に交渉を行った翻訳官のこと。石橋は職務のかたわら英語をおさめ、安政6(1859)年、神奈川詰めとなり外交交渉に活躍。文久2(1862)年から横浜英学校で英語を教える。明治政府では外務省大書記官を務めた。

36. 明治孝節録 / 近藤芳樹編著

宮内庁発行 明治10[1877]

宮内省文学御用掛、近藤芳樹が、明治天皇の皇后の要請により編著した修身書。修身書とは道徳用教科書のこと。近藤芳樹は国文学者で歌人。明治維新後に宮内省の文学御用掛となった。

37. 世界一周 日本 / エゲルマン *

Voyage autour du globe / par I. Eggermont

Paris C. Delagrave 1892-1900

エゲルマン(Isidore Jacques Marie Angélique Eggermont)が日本で訪れた地を詳しく説明している。エゲルマンについての詳細は不明であるが、フランス政府の要人ではないかとの説もある。富岡製糸場と推察される図版もある。富岡製糸場は明治政府の殖産興業政策により、洋式機械を取り入れ設置された官営模範製糸工場である。

38. 日本漫歩 / トリストラム *

Rambles in Japan : the land of the rising sun / by H.B. Tristram

London The Religious Tract Society 1895

英國聖公会の聖職者であった著者(Henry Baker Tristram)が日本で宣教活動にあたっていた娘を訪ねて来日した明治24(1891)年の旅行記。横浜から四国、九州にまで旅した記録と、聖公会の布教活動に対する評価や中国やセイロンの仏教と日本仏教の違いなどにも言及している。エドワード・ワインパーによる45点の図版、写真入り。

39. 憲法志料 / 木村正辞纂輯

出版者不明 1884

推古天皇から後陽成天皇に至るまでの法令を集めたもの。木村正辞(まさこと)は国学者で、政府に命じられ他の学者とともに古代法(律令中心)の史料蒐集と編纂を行った。その中のひとつである。

40. 東京高輪海岸蒸気車鉄道走行之全図 / 一猛斎芳虎画

両国広小路南側(東京) 加賀屋吉兵衛 明治4[1871]

一猛斎(歌川)芳虎により、明治初期、鉄道開業の頃に描かれた錦絵。車体は想像によるものと思われる。日本の鉄道は明治5(1872)年5月、品川ー横浜間の仮営業でスタートした。同年秋に新橋ー横浜間が開通。当時、乗合馬車で4時間かかった距離を1時間で走った。まさしく文明の力であった。蒸気車が走っているのは八つ山(日本初の陸橋)、御殿山や高輪界隈など現在の品川駅近辺である。芳虎は歌川国芳の門人だったが、後に破門となり、一猛斎はそれ以降の号である。

41. 歌舞伎新報

歌舞伎新報社 明治12[1879]-

明治12(1879)年2月創刊された演劇雑誌である。舞台の評判記や劇壇時事を掲載しており、演劇改良運動に協力するなど、当時の劇壇事情を反映しており、資料価値が高い。明治維新以降の風俗を取り入れた散切物(ざんぎりもの)の演目なども存在する。

42. 東京名所鉄道馬車往復上野公園山下之図 / 広しけ画

榎本藤兵エ 明治15[1882]

三代広重による3枚続きの錦絵。上野の山下周辺を往来する鉄道馬車を描いたもの。鉄道馬車は、馬車鉄道ともいい、軌道(レール)上を走る馬車の輸送機関である。三代広重は、初代広重の門人で、二代広重が師家を離縁になった後に婿に入り、自身二代広重を称した(実は三代)。本姓は後藤、後に安藤。画姓は歌川。横浜絵、東京名勝絵、開化絵を多く描いた。

43. 東京開化名景競品川蒸気車 / 梅堂国政画

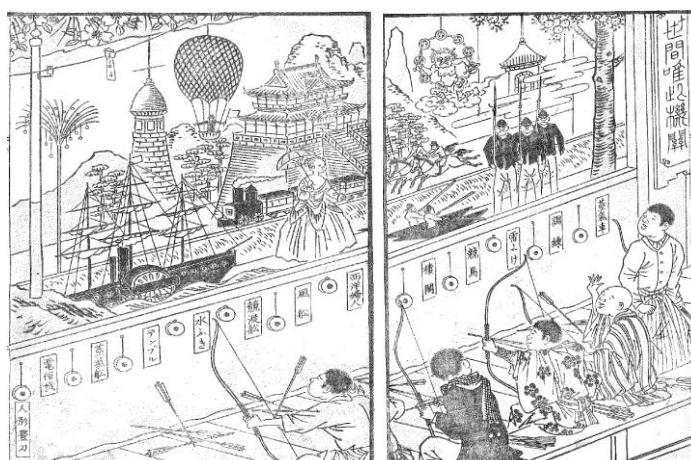
辻岡屋文助 明治7(1874)

梅堂国政は、三代目歌川国貞(さんだいめ うたがわくにさだ)(嘉永元-大正9(1848-1920)年)のこと、江戸時代末期から明治時代にかけての浮世絵師である。一寿斎国政(四代目歌川国政)と称したこともある。蒸気車など文明開化を題材にした浮世絵を何枚も描いた。

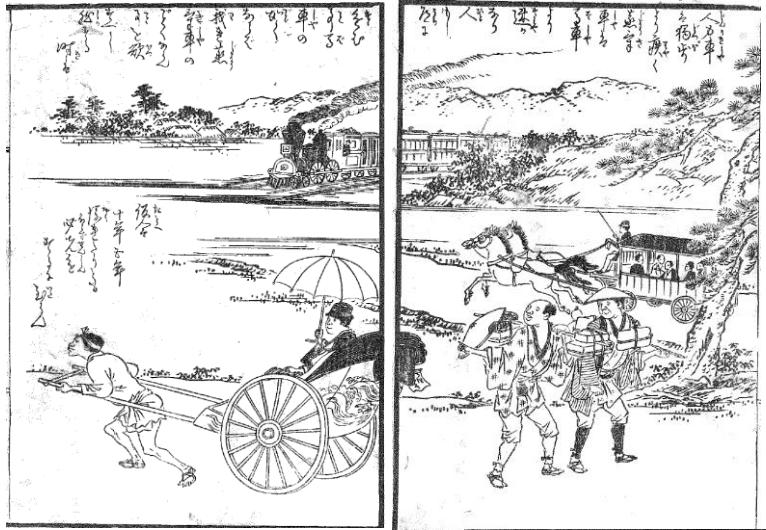
44. 開化進歩の目的 / 加藤祐一著

大坂 書林會社 1873

明治維新後、政府は開化政策を推進した。この時期、多くの啓発書が出版され、文明開化の到達すべき目標を記している。加藤祐一は、経済関係の啓発書を数多く著した明治時代の実業家で、明治11(1878)年、大阪商法会議所設立とともに書記長となり会頭五代友厚を補佐して活躍した。



資料44より

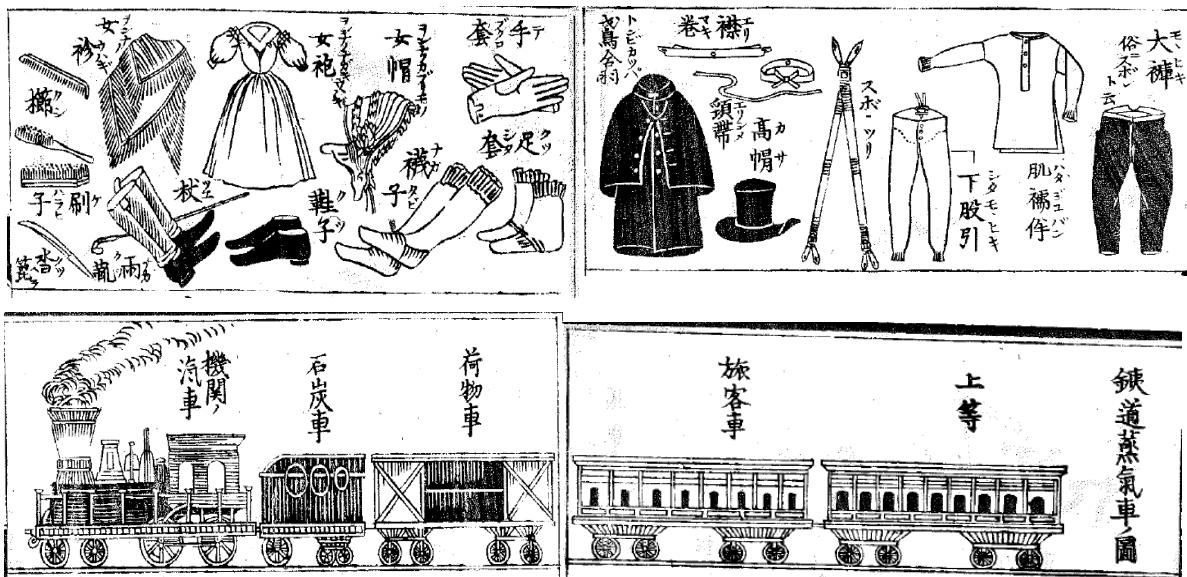


資料44より

45. 開化往来 / 宇喜田練撰 笹木芳滝画

出版者不明 1873

開国に伴い、西洋文明に対する関心も高まってきた時期に刊行されたもの。世界の文物、街、各国事情を解説している。



資料45より

46. 明治改暦：「時」の文明開化 / 岡田芳朗著

大修館書店 1994

明治5(1872)年12月2日をもって太陰太陽暦(旧暦)を廃止し、翌3日を太陽暦(新暦)による明治6年1月1日とした。「文明開化」という開化政策にそって、新しい「時」のシステムの導入を行なった「明治改暦」を解説した資料である。明治政府は明治5(1872)年11月9日に改暦詔書を出した。時刻も1日12辰刻制から1日24時間の定刻制に替えるとした。布告から施行まで23日で実施され、その年の12月(師走)は2日で終わってしまった。

47. 江戸時代に於ける社会教化資料 / 文部省社會教育局編

文部省 1934

「教化」とは、道徳的、思想的な影響を与えて望ましい方向に進ませることであるが、江戸時代中期以後は社会教化の意味が濃くなり、社会教育とほぼ同義に使われるようになった。特に昭和期には、国民道徳を基調とする大衆の思想善導または社会の改善の意味に用いられた。

48. 滑稽新聞 復刻版

ゆまに書房 1993-1994

宮武外骨発行の新聞。明治34(1901)年大阪で創刊。過激の記事を風刺画を入れて掲載したため、人気を博したが、官吏侮辱罪・新聞紙条例違反などでたびたび告訴された。第173号を〈自殺号〉と題して発行し、明治41(1908)年廃刊。宮武外骨は明治・大正・昭和期のジャーナリスト、新聞史研究家。18歳のとき漢和辞典の「亀外骨内肉者也」という説明から外骨と改名、のち〈がいこつ〉を〈とばね〉と改めた。明治19(1886)年『屁茶無苦(へちゃむく)新聞』や、明治20(1887)年『頓智(とんち)協会雑誌』などを創刊したが、風俗壞乱や不敬罪などの理由により発売禁止や廃刊となつた。

49. 大磯海水浴富士遠景図 / 小国政画

片田長次郎 明治26[1893]

大磯は「海水浴場発祥の地」といわれており、明治18(1885)年に蘭書にて海水浴の効用を知った医師・松本順(まつもとじゅん)により大磯海水浴場が誕生した。病気治療のため、海水につかることとして「潮湯治」が以前からあったが、明治以降娯楽へと転じて発展していく。大磯には、「大磯照ヶ崎海水浴場の碑」がある。

50. 横浜絵葉書帖

横浜 トンボヤほか 明治頃□

艶やかな明治から昭和にかけての彩色絵葉書。当時の横浜の街並みを知ることができる。

51. 横浜海岸通之図 / 広重筆

南傳馬町(江戸) 伊勢屋喜三郎 明治3[1870]

三代目歌川広重による横浜港の錦絵。ペリー来航後、日米修好通商条約に基づき、安政6(1859)年横浜港は開港した。図には、2本の波止場と横浜税関の前身である神奈川運上所を中心に、たくさんの人で賑わっている様子が描かれている。多くの日本人が西洋の知識を学ぶために横浜港から旅立ち、西洋と日本を繋ぐ窓口ともなった。横浜港は、明治初期に日本最大の貿易港として発展し、日本の近代化に大きな役割を担つた。

参考資料

- ・ 東海大学書簡シリーズ 33-34、「東海」99号、100号
- ・ JapanKnowledge 「国史大辞典」
- ・ JapanKnowledge 「日本大百科全書」
- ・ JapanKnowledge 「日本人名大辞典」
- ・ JapanKnowledge 「日本歴史地名大系」
- ・ 新島襄：その時代と生涯 / 同志社編著 同志社 1993
- ・ わが若き日：決死の日本脱出記 / 新島襄著 東京 毎日ワニズ 2013
- ・ 船艦門（続通信全覧：類輯之部 30）/ 通信全覧編集委員会編 雄松堂出版 1987
- ・ 幕末明治のホテルと旅券 / 大鹿武著 築地書館 1987
- ・ 高等学校最新日本史 東京：明成社 2003
- ・ 中学社会新しい日本の歴史 東京 育鵬社 2011
- ・ 逝きし世の面影 / 渡辺京二著（平凡社ライブラリー552）平凡社 2005
- ・ 金海奇觀 / 大槻磐溪編 岩下哲典監修・解説 原装影印版 雄松堂書店 2014
- ・ ビゴーが見た日本人/清水勲著(講談社学術文庫) 講談社 2001
- ・ 近代兌換制度の確立と動搖 / 日本銀行調査局編(図録日本の貨幣 8) 東京経済新報社 1975
- ・ 明治孝節錄 / [近藤芳樹編] . 孝道上巻[抄] / [沢柳政太郎著]



「近代の扉を開け－明治 150 年-」

2018 年 10 月 22 日 発行

著 者—東海大学付属図書館

発行者—東海大学付属図書館

<https://library.time.u-tokai.ac.jp/>

〒259-1292 平塚市北金目四丁目 1 番 1 号

電話 0463-58-1211 (代)
